



のびてくる力

齋藤 文雄

桜も今朝の風では大分散れるだろうと思ひながら、庭下駄をつつかけて芝生に出る。そういえば、いつのまにか、芝生は緑色の部分が多くなつて、踏む足の軟い感触もうれしい。柿の芽も、ほころびて、まだ開かないみどりが薄日に輝いている。畑と庭を境した低い竹のまがきに沿つて二列に、三センチ、五センチと赤い粘土性の土に輝が入つて盛りあがつている。よくみると、芽だ。まだ顔を出していないものもあるが、二つ三つは紫に白い粉をふつたような芽が土のわれ目からひよこひよここと、のぞいている。確かに桔梗の芽だ。

こんな軟かい芽に、これだけの土をもちあげ、これだけの土の密度を破つてのびてくる力がどこにあるのだろう。桔梗の芽なんて、ちよつと触れただけでも、すぐ折れてしまひそうなやわらかさだ。それなのに、かすれ傷

ひとつできないで柔和な坊主頭をのぞかせている。土をもちあげ、硬さを破つて出てくる力は、この芽のどの部分がやつてのけたのであらう。

芽の細胞分裂、滲透圧と、なるほど物理的な植物学的な説明は可能であらうが、どうも私には、それだけでは釈然とした気持になれない。弱いとはいへながら、数立方センチの土をもちあげ、堅い土の密度を破つて、あふれ出してくる芽の力、これは目にも見えなないが、敬虔な気持で考えてみなければならぬ問題だ。伸びるものゝ力、それは植物ばかりではあるまい。動物でも同じであらう。人の子でも同じことである。

こどもの成長は早くて、すばらしいという。しかし、現在わたし達にできるのは、伸びてゆく経過の一こま一こまをとらえることではなくて、伸びた結果を測定という物理的な方法で、過去を追うことだけのものなのだ。

こどもの伸びた結果を、あとからその時その時に捉えているに過ぎない。しかし、こどもにも、桔梗の芽が土をもちあげ、土を割るほどの伸びる力はある筈だ。この力という字こそ曲物だ。現在の医学は、内分泌、栄養、環境といろいろな方面から、この力を究明しているが、要するに、それらはめくらの象の足のたとえ嘶しではない。こどもの身体の仿きの全体的なハーモニーから生

れでる伸びる力のことを完全に説明してはいない。一体この力というのは何だろう。これは現在では科学だけの問題としては、あまりにも大きすぎる。私達は敬虔な気持で、これを受けとるべきである。やがては科学だけで究明できる時代もくるかも知れない。しかし、現在の科学で思ひあがつてはならない。科学者にもバイアスな心が必要だと思う。

ついでこの間、広島の研究から招待されて、この発見の問題について、日米の医学者が二日間いろいろと論じあい、協議しあつた。レイノルズ博士は、こどもの發育ばかりの研究に卅年の生涯を献げ、まだ何もつかんでいないといはれる。彼の研究報告は数多くの貴重な業績をあげているのであるが、自らは何もつかんでいないという。これこそ私たちの科学する心でなければならぬ。

それはそれとして、わたし達は、日常のこどもの保育で、この面をどうとり扱つたらいいだろう。伸びる力の究明は将来の問題であるとしても、私達はこどもの伸びる傾向なり経過なりについてはよく知つてゐる。しかし、桔梗の芽と違つて、こどもでは伸びるといつても、その中には身体面と精神面の二つの因子が適当に調和された姿で入つてゐることを忘れてはならない。この両面

から、否両面のしつくりと混和した生きた形から、こどもを見てゆかなければならない。おのおのこどもの伸びる力を知ることができないとしても、のびてゆく方向にむかつて巧みに棹をあやつることはできる筈である。

そして、時々このこどもの姿に、私たちの求めているものと、伸びてゆくこどもの実態のありさまとを照しあはせて、せめてもの慰めにするのが精々である。心の伸び方に伴う精神発達、からだの伸び方に伴う形態学的、力学的な発達、そのモチーフとなるものに対してはどんなに私たちが手を加えようとしても駄目だ。ふつう遺伝とか素質とかいう言葉の蔭にかくれてしまいがちであるが、本当のところ、柔い桔梗の芽が百グラムも二百グラムもあるような土の重味にうちかつてゐるような力がこども自身のからだの中にも秘んでゐるのである。この力は人のもつ現在の科学の領域より、やゝ高いところにあるようだ。

その高いものに一步一步近づく努力は、どんな保育のエキスパートでも心にとめておくべきではなからうか。

さればこそ私たちは、ひとりひとりのこどもの保育には、敬虔な気持で観察し指導する気持が必要だといふのである。